

上原 兼善

Ⅲ 寛永期の琉球使節

1. はじめに

謝恩（恩謝）使・慶賀（賀慶）使が島津藩主に率いられて江戸に参向することは古くから「江戸上り」といい慣わされてきたが、史料上そのように表記した例はあまり見られない。むしろ多くみられるのは「江戸立^{だち}」である。琉球使節が江戸に行くことを「江戸上り」とよんだのは、鹿児島に行くことを「上国」と称したことに由来するのではと思うが、事実関係については今後詰めていく必要がある。ともかくここでは史料上の表記にしたがって「江戸立」の表現を使うことにする。

「江戸立」（江戸上り）に関するすぐれた先行研究としては宮城栄昌氏の『琉球使者の江戸上り』〔宮城1982〕、横山學氏の『琉球国使節渡来の研究』〔横山1987〕をあげることができる。両氏の間では1634年（寛永11・崇禎7）と次の1644年（寛永21・崇禎17）に謝恩・慶賀両使の派遣があったか否かという点では見解がわかれているが、ともに1634年（寛永11）をもって「江戸上り」の始まりとする点では一致している。これに対して最近の研究は琉球使節の成立という点では1644年の使節派遣を重視する見解が大勢をしめている。たとえば豊見山和行氏は、朝鮮使節を範例にしたこの年の使節参府が使節派遣の制度化に途をひらくものとし〔豊見山2004：125〕、板谷徹氏は諸礼式が整ったという意味で実質的な初回にあたるとする〔板谷2015〕。また木土博成氏は、「寛永二一年に挙行された江戸上りは、①徳川・尚家の慶弔事という継続性のある名目に対し、②薩摩藩主が引率したもので、③琉球国王が正式に派遣したものであることか

ら、ここに琉球使節が成立したといえる」と述べている〔木土2016〕。

ここでは上記の先行研究に拠りながら、特に琉球使節と後水尾天皇（上皇）との接触について取り上げ、そこから浮かびあがってくる若干の問題について私見を述べてみたい。琉球使節の成立と捉えられる1644年の「江戸立」にいたるまでの使節上洛の実態を簡単に整理して示すと次のようになる。

- ・寛永3年（1626）：大御所徳川秀忠・将軍家光京都二条城に後水尾天皇の行幸を迎えるにあたり、島津家久、今帰仁親方（孟宗能）ほか楽人らをひきつれて上洛。
- ・寛永7年（1630）：4月18・21日、家光・秀忠が薩摩藩邸に「御成」。「楽人上下三拾人余」による奏楽あり。9月16日、帰途天皇（明正）の要請により内裏にて奏楽。
- ・寛永11年（1634）：冊封を無事終えることができた御礼使としての佐敷王子、また年頭使としての金武王子を京都に召す。閏7月9日、将軍家光二条城で使節を引見。
- ・寛永13年（1636）：10月13・24日、琉球人ら仙洞御所（後水尾上皇居所）で奏楽。

2. 寛永3年の琉球使節と後水尾天皇

1626年（寛永3・天啓6）に上洛をした使節は今帰仁親方宗能である。宗能は『中山世譜附巻』1によれば年頭使として鹿児島に上り、その後「楽童子拾余名」を引き具して上洛、京では「帝王」（天皇）の御前で奏楽、それぞれ銀子を賜っている⁽²⁾。寛永3年11月6日付の中山王あての家久書状も「然者今

帰仁同心ニ而罷渡候衆三人、今度京都へ召列候⁽³⁾』と述べており、楽童子の数はちがうものの、今帰仁らの上洛を裏付けている。後水尾天皇の二条城行幸の計画は前年に立てられているから、大御所徳川秀忠・将軍家光が京都二条城に後水尾天皇を迎えるにあたり、琉球使節の率領もすでに計画にあがっていたに違いない。そうでないと楽童子を含む使節の編成はもちろん、路銀の手当もできまい。琉球側ではそのことをめぐって議論が展開をみていたことが想定される。

琉球使節の率領について板谷氏は、家久に御座楽を幕府に対して政治的に利用し、かつ禁裏にたいしては交誼を深める思惑があったとみる〔板谷2015〕。それは異国支配の功名を天下に誇り、幕府・禁裏との関係をアピールするのに十分政治的効果を発揮したものと思われる。

1626年派遣の使節が帰国してから間もなく、琉球は今度は江戸への使節派遣を家久より申し渡される。今度は大御所徳川秀忠と将軍家光を藩邸に迎えること、いわゆる「御成」を企図し、その場に琉球使節を侍らそうという訳であった。琉球へは1628年（寛永5・崇禎1）にはすでにそのことが伝えられていた様子が、同年9月10日付で家老喜入摂津守より琉球三司官宛てに送られた書状から判明する。かつてとりあげたことのある史料であるが〔上原2009〕、テーマとかわる興味深い内容を含んでいるので再度とりあげることをお許しいただきたい。理解しやすいように口語体にして掲げる。

- (1) 一年頭のご祝言があったこと、江戸の家久のもとに報告した。
- (2) 国頭・今帰仁についてはもとのごとく三司官役に戻し、知行・屋敷を給するように、との江戸（家久）よりの仰せである。
- (3) さへ・よさの処遇ももとに戻すようにとの江戸よりの仰せである。そのように申し付け帰国させること。

- (4) 一 来々年御成につき、この地諸事繁多である。それにつきその地の出物として知行一石につき銀子一匁ずつを課す。
- (5) 一 その地より毎年御使者をさし上せているが、進物などは要らざる心遣いなので、以後は分量を定め置く。詳細は別紙の通りとする。付^{つけたり}（略）
- (6) 一 その地負担の毎年の出物について、滞っている寛永3年までの分は清算を済ませること。
- (7) 一 かねて指示したように童子に三線・楽・小歌を油断無く稽古させ、来年の夏参上させること。

まず(1)は年頭を寿ぐ使者があったことは江戸の家久のもとに伝えた、とするのであるが、恒例の年頭使の派遣のことであるので、あまり特別の意味はないように思われる。ところが、ここでわざわざ使者の挨拶を受けたことを家久に伝えたことに触れたのには、当初それが危ぶまれる状況があったからではないかと思われる。それはいかなる事情であったのか。ここで考えられるのは崇禎帝の即位を伝える明の指揮閔邦基の渡来である。閔邦基の琉球渡来は1628年（寛永5・崇禎1）のことであるが、それに関する情報はおそらく貢船などによってもたらされていたであろうから、年頭使の派遣が一時見合わされていたことが想定できる。実は同じ事情で1625年（寛永2年・天啓5）にも正使の派遣が見合わせられているからである。すなわちその前年に明の指揮肅崇基が渡来、熹宗の登極を伝えてきた。肅崇基が翌年までとどまったため、1625年仮に稲福なる者が派遣され、その後に正式の年頭使佐数が派遣⁽⁵⁾されている。1628年（寛永5・崇禎1）の閔邦基渡来の時も琉球は島津氏にそのことを屋宜なる者を遣して報告におよんでいるが、その前に時をみは⁽⁶⁾からって玉城親方朝智を派遣、玉城は2月に鹿児島にいたったようである。⁽⁷⁾喜入書状の(1)でわざわざそのことに触れてあるのは、その派遣をめぐっ

て問題になったからであろう。島津氏、徳川幕府に対する使節の派遣にあたっては中国に知られないよう配慮が加えられたのである。

さて、(2) は国頭・今帰仁ら三司官役を解職された者たちの復職、知行・屋敷の回復を指示するものである。この一件は相当深刻なものであったことを推測せしめる。それより以前の7月19日付で、家久自身が尚豊王に直接書を宛て「先年其の地〈琉球〉に唐船が来着した折に島津家の家老衆が巻物を買取とろうとしたところ、理に背いた振る舞いをしたかどで、三司官役を罷免、拘禁したよしである。ふとしたはずみで起ったことなのでそのような処置はよろしくない⁽⁸⁾」として処分の撤回を申し入れているところからすると、原因は唐船がもたらした巻物の買い入れをめぐる島津家家老衆とのトラブルにあったことがわかる。唐船来着の事実についてははっきりしないが、漂着船でないようだから閩邦基船の可能性が高い。(3) の「さへ」(砂辺カ)「よさ」(与座カ) も確証はないがおそらく事件の関係者であろう。こうした交易の利権をめぐる島津家の重臣と琉球の重臣が相対立するという状況が潜在的に存在したことを理解する必要がある。

(4) は1630年(寛永7・崇禎3)、琉球使節を招き、江戸藩邸で大御所・将軍を饗応しようとした(「御成」)が、その費用捻出のために琉球にも1石当たり1匁ずつの出銀負担を求めるものである。

(5) は、これと併せて1622年(元和8・天啓2)から常態化した「年頭使」の派遣に際して、老中衆・御使衆・琉球取次衆・同筆者への進物高を示したものである。この条項は琉球使節派遣の制度整備に向けて大きく動き出したことを理解せしめる。

それにあたって厳格な態度で臨もうとしていたことを(6) および(7) は示している。(6) は使節派遣の費用の負担は当然で、毎年の出物の未進分のうち1626年(寛永3・天啓6)までの分については清算するようながして徴租の手を決して緩めることをしていない。そして、(7) では三線弾きの童子たちにその稽古に勤しみ、座楽・「小歌」の稽

古に油断無く励んで来夏必ず参上するように、厳しい口調で指示している。

3. 寛永7年大御所・将軍御成の場へ

上に掲げた1628年(寛永5・崇禎1)の三司官宛喜入書翰は、琉球が管弦をもって将軍家・天皇家を慰める一つの「役」をもって「附庸国」としての奉公を示すことが強く求められていったことを示しているが、この後、1630年(寛永7)の大御所・将軍の「御成」へ向けて進上物、儀礼の運び方をめぐって細かな実務協議がなされたものと思われる。「御成」の準備過程、使節の出発から帰国までの儀礼の詳細については使節関係者の「家譜」、伊勢貞昌の「中納言家久公江御成之記」⁽⁹⁾・『球陽』・『大猷院殿御実紀』などを利用した板谷氏[板谷2015]・本土氏[本土2016・2017]の研究があるので、詳細はそれに譲ることにし、ここでは使節の動向を比較的詳細に伝えている牧氏三世宗淳(唐名牧達村)の家譜⁽¹⁰⁾を次に引用して若干気がついたことを指摘しておきたい。ただし、史料は原型のままでなく読み下しにし、年月をできるだけ頭に出すようにして理解しやすくしたことをお断りしておきたい。

三世宗淳 翁長親雲上

童名思徳、唐名牧達村、万曆四十五年(1617・元和3)丁巳生

(父・母・室・嗣子等、略)

尚豊王世代

天啓元年(1621・元和7)辛酉若里之子となる。崇禎二年(1629・寛永6)己巳、家久公従り、将軍家光公を請待するに因り、楽童子五六輩を将に薩州に赴かせんとの命旨有り。是に因り楽童子と為り、主取欽氏城間親雲上清信^{とも}と俱に、同十二月十四日那覇出船、翌年(寛永7)二月^{げいふ}慶府に入る、同年、有川五左衛門殿に召し連れられ、慶府を発し、同四月江府柴(芝)御屋敷に到る。家久公に朝えて^{まみ}楽を奏す。御喜悦有り。その後楽装束の為に金の釵^{かんざし}・同村花釵・薄

入襖繻子十二領・紕縮緬、並びに綸子・細袖・金襴大帯一筋を賜る。

同（4月）十七日、上御屋敷に於いて四座（観世・宝生・金春・金剛の能四座）の大夫と俱に楽屋に入る。

同十八日、家光公御数奇座に入る。御膳・御茶等を進上相済み、出御。御広間にて御能三番これ有り。後玉筵近く黒書院に於いて奏楽なり。大樹御歡喜なり。

同二十二日、秀忠公御成りの時楽前に照らす。同二十四日従り数日、相続御兄弟衆・諸大名衆招請の時、楽同前。その後尾張大納言殿・紀伊大納言殿・水戸中納言殿殿下に於いて奏楽。しかのみならず大名衆の家臺に於いて之を奏し、且つ光久公より添指一腰、並びに北郷式部大輔久真御自筆の掛字一枚之を拝領、万般事完る。暇を賜りて同八月下旬、江戸を発つ。

九月十三日京都を經過するの時、帝王より音楽を聞かんと欲するの宣上を承る。故に同十六日、楽を内裏にて奏す。了りて御萬（菓カ）子並びに加賀杉原一束・銀子三枚を賜り、退城。且つ在京の間、御免有りて洛中を一見するなり。同月（9月）下浣 慶府に回る。

同十一月帰国。其の後御書院に於いて江戸装束を以て奏楽なり。

崇禎三年（1630・寛永7）庚午四月、御在番奉行菱刈伴右衛門殿薩州の命令を帯び、来たりて知行高二十斛を賜う。

崇禎五年（1632・寛永9）壬申四月、光久公従り単物一領を賜う。【割書き】新納加賀守・最上渡佐守（殿）本国に帯び来るなり。

同九年丙子、黄冠に叙せらる。

同十年丁丑、誦谷山間切地頭職に任じられる。

これによると、宗淳（思徳）は1617年（元和3・万暦45）の生まれで唐名を牧達村といった。1621年（元和7・天啓1）若里之子となったが、1629年（寛永6・崇禎2）に島津家久より將軍家光

を請待するための楽童子派遣の命が下り、5人のうちの1人に加えられた。宗淳数え13歳の時である。これは「御成之記」と一致している。宗淳らは「主取」欽氏城間親雲上清信に従って同12月14日に那覇出船、翌1630年（寛永7）2月、慶府に入ったようである。貴人に捧げる室内楽を取り仕切る責任者はこのころ「主取」といい、のちに「楽正」と変わることになる。すでに1710年（宝永7・康熙49）の使節の中にその名が見えている。⁽¹¹⁾

宗淳らは同年、薩摩藩の重臣有川五左衛門に召し連れられて、慶府を出発、同4月江戸芝の薩摩屋敷にいたると、早速島津家久にまみえ、楽を奏している。4月18日、芝の薩摩藩上屋敷を訪れた將軍家光は、御数奇座で御膳・御茶を済ませたのち、大広間で御能三番を鑑賞、それより黒書院に席を移し、宗淳ら楽童子の奏楽に臨んでいる。「大樹（將軍）御歡喜なり」との記事は伊勢貞昌の「御成之記」と一致している。演目はのちの記録からすると、おそらく明・清楽に一曲ほど琉球楽が入っていた程度であっただろう。

大御所秀忠の「御成」はここでは4月22日となっていて、「御成之記」の21日と一日のずれがある。しかし、大きなずれでないところからして、むしろ「家譜」の信頼度の高さを思う。

4月24日より以降は將軍家連枝、尾張・紀伊・水戸の御三家、諸大名衆の招請に応じて奏楽している。これらのことは「御成之記」にはみられない。

江戸でのすべての公務が終わったのは8月のことで、同月下旬には將軍に暇を乞い、江戸を発ったが、京都にいたった時、天皇家より奏楽を所望された。宗淳の「家譜」は「九月十三日京都を經過するの時、帝王より音楽を聞かんと欲するの宣上を承る」と、突然に天皇家より奏楽の所望があったように記しているが、実際は早くから申し入れがあり、日程調整のうえで実現したものであったであろう。奏楽を望んだのは明正天皇ではなく、譲位したばかりの後水尾上皇とみて間違いはあるまい。楽童子たちは同16日に内裏で奏楽、菓子・加賀杉原紙1

束・銀子3枚を下賜されている。

内裏で奏楽を終えて使節一行は9月下旬に鹿児島に回着、11月に琉球に帰国におよんでいる。それで一行の役目が終わったのではなく、大御所・將軍と対面した通りの装束（江戸装束）で御書院において国王にまみえ、楽を奏している。それは復命の儀式であった。

こうして1630年の使節に関する記録をみると、後の使節派遣に踏襲されている点が少なくない。まず楽童子に着目すると、板谷氏がいうようにすべてが若衆ではなく、16歳以上の二才2人と15歳以下の若衆3人の混成であるが、5～6人というのは後に引き継がれていく数である。これらの楽童子を束ねる「主取」、後の「楽正」も登場している。徳川家の連枝、御三家の面前での楽の披露、使節一行の能の鑑賞など大和芸能に触れる機会の設定、そして帰国後の復命の儀式なども後々まで踏襲されていくものである。このようにみると、諸礼式のうえでは1644年（寛永21・崇禎17）に整備をみるとしても、1630年の使節派遣はそれにいたる重要な階梯と捉えられるように思う。

なお、宗淳の「家譜」でいま一つ注目したいことがある。それはこの楽童子の役を果たして後、宗淳が破格の取り立てを受けていることである。すなわち、帰国の翌1631年（寛永8・崇禎4〈崇禎3年とするが誤りであろう〉）4月、家久の命を受けた在番奉行菱刈伴右衛門より知行20石を給され、ついで1636年（寛永13・崇禎9）に黄冠に叙せられたかと思うと翌37年（寛永14・崇禎10）には20歳の若さで読谷山間切の地頭職に任じられている。これをみると、島津家久は尚氏の意向にかかわりなく琉球士臣の自身への奉公を期待していたことになる。それは先の国頭・今帰仁の三司官の復職に関する指示にもうかがうことができる。

4. 寛永11年ならびに13年の使節の上洛

1634年（寛永11・崇禎7）には、1626年に引き続いて將軍家光の上洛が挙行された。その時島津家

久は、折しも鹿児島にあった琉球の2人の琉球使者を京に呼び寄せた。使者の1人は尚豊王が冊封の儀礼を無事すまうことができた御礼の使者佐敷王子と、いま1人は改年を寿ぐための年頭使金武王子である。⁽¹²⁾ 通説としてはこれをもって謝恩使・慶賀使が名目的に分岐して派遣されるようになる起点と位置づけられる〔宮城1982、横山1987、豊見山2004、上原2009〕。

しかしそう捉えるには史料的には少し問題が残る。この時の使者について、たとえば徳川幕府の外交関係記録である『通航一覽』は「卷之五 琉球国部五」の最初の注記の部分で「賀慶使は寛永十一年、恩謝使は正保元年をはしめとす」と記し、寛永11年（1634）に派遣があったのは慶賀使のみで、謝恩使の派遣は正保元年（1644）のこととしている。ところが同じ記録は本文中では『中山聘使略』を引いて「寛永十一年閏七月、尚豊王賀慶正使佐敷王子、恩謝使金武王子をして方物を献す」とし、佐敷王子を賀慶使、金武王子を恩謝使としていて、記述に整合性を欠いている。こうしてみると、賀慶使が1634年（寛永11・崇禎7）にすでに派遣をみていたとするにはなお確たる根拠が必要といえよう。最近賀慶使・恩謝使の枠にはめ込むのをやめて、家光から秀忠への「御代替」の「御礼」使という木土博成氏のような捉え方も出てきている〔木土2016〕。しかし、島津側としてはそれぞれ性格のちがう使節の派遣にこだわっているのであるから、2使節がいつ登場してくるのか、という問題は引き続き追究する必要があるだろう。

この問題に関する議論はいまは紙幅の関係でできないので、ここでは『中山世譜 附卷』・『大和江御使者記』にしたがって佐敷王子朝益を恩謝使（謝恩使）、金武王子朝貞を年頭使と理解しておきたい。これら2使節を上洛させたのには島津家久のある種の政治的思惑が絡んでいたことは事実であろう。その点で特に注目されるのは板谷氏が指摘するように、家久は將軍家光が上洛してきた機会に転封を申し渡されるのではないか、という不安を抱いていた

ことである（「今度御上洛候ハハ、いかさま御しを
き共候するかと申候間、無心元事にて候、国かへ共
御さ候するやとおもひ候事⁽¹³⁾」）。1632～33年にかけ
て、大名の改易・転封が続いていたから、家久が不
安を抱いたのも当然であろう。そうしたなかで、琉
球の使節は異国支配の功名を強調するうえで格好の
材料であった。閏7月9日に家光の引見の儀が終
わると、それが効を奏したかのように、閏7月16
日、薩摩・大隅・日向三国のほか琉球国12万
3700石を書き加えられた領知判物（領知を安堵す
る文書⁽¹⁴⁾）が給された。これによって島津氏の琉球支
配の根拠がより明確となった。

しかし幕府に琉球「附庸」の事実を認識させるの
が意図するところであったのならば、すでに1630
年（寛永7・崇禎3）の「御成」の場で済んでいる
はずである。にもかかわらずあえて使節を上洛させ
たのは、諸大名同様に上皇の行幸に供奉させること
によって「附庸」の実態を天下に知らしめるねらい
があったのではないか。もちろんそれは琉球を威圧
するのに十分な政治的効果を発揮したといってい
よい。

琉球使節の上洛はそれから2年後の1636年（寛
永13・崇禎9）にもなされている〔板谷2015〕。
この時は後水尾上皇より琉球音楽の聴聞を求められ
てのことだとされる。しかし、それが島津氏の上級
領主としての位置を琉球に示すうえで大きな意味を
もったことに変わりはない。使節の派遣要請は前年
に出されており〔板谷2015〕、琉球側ではこれを受
けて進物の準備、使節の編成、座楽の稽古等にとり
かかったものと思われる。その間の細かい遣り取り
自体がいっぽうの、他方への従属が確認されていく
過程であったといえよう。

この時仙洞御所で奏楽を演じたのは、のちの「主
取」「楽正」を指すかと思われる「主楽」小橋川親
雲上篤にひきいられた6人の楽人たちであった。
まだ楽童子と二才の混成楽団である〔板谷2015〕。
注目されるのは、後水尾上皇が雅楽寮の伶人（楽
人）たちに琉球音楽の習得を命じていることで、そ

こに上皇のこだわりようがわかる。しかし、正道を
重んじる伶人たちは、琉球の音楽に対して礼にかな
わない「夷狄」の楽として眉をひそめるありさまで
あったという⁽¹⁵⁾。明楽と清楽が中心であったのであ
ろうが、雅楽に慣れ親しんできた日本人にとってた
だめずらしいだけであって、座楽が喜ばれたとは思
われない。

5. おわりに

こうして、21年間におよぶ寛永期をながめてく
ると、島津家では琉球使節の率領を可視化すること
につとめている様子がうかがわれる。島津家は寛永
3年の後水尾天皇の二条城行幸の場で奏楽を献じさ
せたのにはじまって、1630年（寛永7・崇禎3）大
御所・将軍の御成、それにつぐ1634年（寛永11・
崇禎7）の将軍家光上洛の機会を利用した琉球支配
のアピールは、大名の改易・転封の続くなかで琉球
高を加えた領知判物の下付となって実を結ぶ。島津
氏はここにおいて琉球に対してその支配の正当性を
主張できる確たる根拠を得たのであった。

使節派遣の実現はまた琉球との間の支配と服属の
関係を確認していく重要な要素であった。毎年の年
頭使派遣はそういう意味では見逃せないことである
が、使節を日本の最高権力・伝統的権威の前に引き
出すことが、そうした双方の関係をより強固なもの
にしていく効果を生み出したことは否定できまい。

しかし、使節の実現は琉球にその属国としての立
場を認識させる意味をもったとしても、将軍家・天
皇家による破格の馳走は、いっぽうで琉球の自尊心
をくすぐり、自立心を高める方向へ作用した可能性
もないわけではないであろう。島津光久は、1644
年（寛永21）使節登城後の7月26日付で尚賢王に
宛てた書状⁽¹⁶⁾で、幕府老中らより「公儀が直かに馳走
しては琉球国人らは今後心やすくするためだと驕る
のではないか」と問われたことを記している。幕閣
の間で琉球の驕りが心配されていたことは興味深い
ことである。光久がわざわざそのことに触れたの
は、木土氏がいうようにやはり事前に釘をさしたと

いうべきであろう [木土 2016]。

すでに簡単にふれたように寛永期は琉球の尚氏と島津氏の間にはさまざまな矛盾と対立が吹き出てきた時期である。島津氏は 1631 年（寛永 8・崇禎 4）には財政再建の命運をかけて琉球貿易に積極的に介

入するが、思うほどの成果をあげえず、琉球に違背の心ありとまで疑うにいたる [上原 2009]。そうした政治状況を視野にいて寛永の使節派遣問題を捉えなおしてみる必要があるように思う。

【注】

- (1) 宮城氏は 1634 年（寛永 11）に始まった謝恩使は 1644 年（正保 1）・1649 年（慶安 2）と続き、「慶賀使」の派遣は 1653 年（承応 2）がはじめてのことだとする [宮城 1982：14]。これに対して、横山氏はすでに 1634 年（寛永 11）に慶賀使とともに謝恩使の派遣があり、1644 年にも同様に両使の派遣があったとする。
- (2) [板谷 2015] 所引孟姓五世宗能の家譜。
- (3) 「旧記雑録後編」5、65 号。
- (4) 「旧記雑録後編」5、179 号。
- (5) 『中山世譜』巻 8、『中山世譜附巻』1、『大和江御使者記』。
- (6) 『中山世譜附巻』1。
- (7) 『中山世譜附巻』1、『大和江御使者記』。
- (8) 「旧記雑録後編」5、167 号。
- (9) 「旧記雑録後編」5、303 号。以下「御成之記」と略記する。
- (10) 「家譜資料（四）那覇・泊系」『那覇市史 資料篇』第 1 巻 8、478。
- (11) 『琉球来使記』[宮城 1982：37]。
- (12) 『中山世譜』巻 1、『大和江御使者記』。
- (13) 「旧記雑録後編」5、617 号。
- (14) 「旧記雑録後編」5、756 号。
- (15) 『隔莫記』第 1、寛永 13 年（1636）10 月 24 日の条（赤松俊秀校注、思文閣出版、1997 年復刻版）、38。なお『隔莫記』は、金閣寺の住職、鳳林承章の日記である。
- (16) 「旧記雑録後編」6、416 号。

【参考文献】（五十音順）

- 飯沼雅行 2004 「朝鮮通信使・琉球使節通航時の綱引助郷―撰河両国を中心に―」『交通史研究』54
- 飯沼雅行 2006 「幕府広域役の実現過程に見る個別領主と地域 琉球使節綱引組合大塚組の事例」『地方史研究』56-6
- 飯沼雅行 2009 「幕府広域役の命令と情報の伝達―琉球使節通航時の綱引役の場合―」『ヒストリア』217
- 池宮正治 1995 「資料紹介『儀衛正日記』」『琉球大学法文学部紀要 日本東洋文化論集』1
- 板谷徹 2015 「楽童子の成立―紋船使から江戸立へ―」同『近世琉球の王府芸能と唐・大和』岩田書院
- 市毛弘子 1992 「琉球王子と清見寺」『地方史静岡』21
- 上原兼善 2009 「琉球貿易への介入」『幕藩制形成期の琉球支配』吉川弘文館
- 大島延次郎 1939 「琉球使節の江戸参礼」『日本交通史論叢』
- 太田三郎 1996 「琉球使節江戸参府の触書」『沖縄県史研究紀要』2
- 沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室編 2001 『沖縄県史ビジュアル版 8 江戸上り 琉球使節の江戸参府』沖縄県教育委員会
- 小野まさ子 2002 「二川宿本陣資料館の江戸上り関係資料」『史料編集室紀要』27
- 紙屋敦之 1990a 「琉球使節の解体」琉球王国評定所文書編集委員会編『琉球王国評定所文書』5、浦添市教育委員会
- 紙屋敦之 1990b 「琉球国司考―鎖国制下の琉球支配―」同『幕藩制国家の琉球支配』校倉書房
- 紙屋敦之 1996 「岡山藩と対外関係」『1994・1995 年度科研報告書 岡山藩の支配方法と社会構造』（代表：深谷克己）
- 紙屋敦之 1997 「琉球使節の江戸上り」同『大君外交と東アジア』吉川弘文館
- 紙屋敦之 1999 「琉球の慶賀使について」『歴史と地理』530
- 喜舎場一隆 1993 「琉球使節の往来」同『近世薩琉関係史の研究』国書刊行会
- 木土博成 2016 「琉球使節の成立―幕・薩・琉関係史の視点から―」『史林』99-4
- 木土博成 2017 「後水尾上皇・明正天皇の前で奏楽した琉球人」『沖縄文化研究』44

- 木村吉聡・下鍛冶尚真編 1999『琉球使節の江戸上りと御手洗』私家版
- 倉地克直 2014「琉球使節と岡山藩」『文化共生学研究』13（岡山大学大学院文化科学研究科）
- 佐藤権司 2007『朝鮮通信使・琉球使節の日光参り 三使の日記から読む日光道中』随想舎
- 下関市立長府博物館編 1996『東アジアのなかの下関 近世下関の対外交渉』（特別展図録）下関市立長府博物館
- 玉井建也 2006「琉球使節通行に対する「御仕構」態勢について—伊予国津和地島を事例として—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第51輯第4分冊
- 玉井建也編 2006『近世日本における外国使節と社会変容—『儀衛正日記』を読む』紙屋敦之研究室
- 玉井建也 2007「朝鮮通信使・琉球使節通航と情報・接待・応対—伊予国津和地島を事例として—」『風俗史学』36
- 玉井建也 2008a「琉球使節派遣準備と解体過程—「最後」の琉球使節を通じて—」『交通史研究』67
- 玉井建也 2008b「近世琉球使節通航と海域をめぐる情報—伊予国津和地島を事例として—」『日本歴史』727
- 豊見山和行 2004「江戸幕府外交と琉球」同『琉球王国の外交と王権』吉川弘文館
- 豊橋市二川宿本陣資料館編 2001『琉球使節展：東海道宿駅設置400年：開館10周年記念』（図録）豊橋市二川宿本陣資料館
- 広瀬隆久 2004「琉球王国使節と「琉球人来朝之式」」『東京学芸大学附属高等学校研究紀要』41
- 福山市鞆の浦歴史民俗資料館編 2006『知られざる琉球使節 国際都市・鞆の浦』（特別展図録）福山市鞆の浦歴史民俗資料館活動推進協議会
- 外間正幸 1969「江戸時代琉球使節の音楽と舞踊について」『琉球政府立博物館館報』2
- 真栄平房昭 1991「幕藩制国家の外交儀礼と琉球」『歴史学研究』620
- 宮城栄昌 1976「「江戸上り史料」中の芸能史料」『沖縄文化研究』3
- 宮城栄昌 1980「第一回江戸上り」『琉大史学』11
- 宮城栄昌 1981「正徳4年の江戸上り時に起きた書翰問題」『沖縄国際大学文学部紀要 社会学科篇』9-1
- 宮城栄昌 1982『琉球使者の江戸上り』第一書房
- 三宅英利 1989「琉球使節と小倉藩」『北九州大学文学部紀要 B 系列』21
- 森威史 1992「嘉永三年琉球使節の江戸参府」『博友』6（沖縄県立博物館友の会）
- 横山學 1979「琉使名古屋通行と貸本屋大惣」南島史学会編『南島—その歴史と風土—Ⅱ』第一書房
- 横山學 1987『琉球国使節渡来の研究』吉川弘文館

【史料】

- 『中山世譜』：伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編『琉球史料叢書』4、井上書房、1962年
- 『中山世譜附卷』：伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編『琉球史料叢書』5、井上書房、1962年
- 『大和江御使者記』：東京大学史料編纂所写本
- 「旧記雑録後編」5：鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料 旧記雑録後編5』、鹿児島県、1985年
- 「旧記雑録後編」6：鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料 旧記雑録後編6・附録1』、鹿児島県、1986年